批評及び紹介

トーマス氏 迦膩色迦年代論

英國亞細亞學會誌一九一三年七月號所載 F. Thomas 氏論文の要領。

迦膩色迦王の年代に就て異說少からず、現に北印度迦王の舊領 Taxila 其他の地にありて學術上の發掘事業を行へるを以て、將來必ず新資料を得らるべきを待ち、正確なる論證をなすに足らんことを期せり。然るに、ケチデー氏は最近長篇の論文を草し、迦膩色迦王に關する研究を發表せられたれば（參照本誌前々號及び前號）、吾人この方面の研究に從事する者、亦一言なかるべからず。

英國博物館の Percy Gardner 教授の著作 Catalogue of the coins of the Greek and Scythic kings of Bactria and India. によれば、西曆紀元前第三世紀の中葉、セレウコス統諸王の治下にある領土は、其東部に叛亂生じて著しく衰頽したり。即ちパルシヤ（安息）民族は先づ叛旗を飜して次第に宗主國の領地を奪ひ、又た希臘族の Diodotus は叛してバクトリヤに據り一王國を建つ。其後 Demetrius 及び Eucratides の二侯出てゝ武威を振ふに及んで、此等の希臘侯伯の兵は、バクトリヤの南 Paropamisus 連山を越へて下り、カーブル・アフガン・並に Panjab 西部を占有したり。此に於て、Demetrius は Arachosia に一市街を建てゝ Demetrias と名け、印度にも一市街を設けて Euthydemia と號す、一に Sāgala と稱するもの是なり。後年この二侯は互に相爭ひ、希臘種族の王國二分して、Demetrius はカーブル・バクト

リヤを領し、Eucratides は印度のパンジャーブを有するに至れり。紀元前第二世紀の中葉及び後半に於て、Eucratides の末裔北印度に榮へ、殊に Milinda 王は文武兼備の明君として、佛教家那先(Nāgasena)と哲學宗教上の論議をなし、『ミリンダの發問』(Milinda-pañha 漢譯那先比丘經)と題する佛典として、今尙ほ世に行はる。

ミリンダ王の頃、塞(Sakae)及び吐火羅(Tocharii 月氏)の二種族は相繼ぎて Jaxartes 河方面並に支那領トルコスタン地方よりバクトリヤに侵入し來り、紀元前第二世紀の末葉に至りては、塞種族は Sakastan 即ち Sistan に入り、西は Arachosia に進み、東は印度河方面に往き、希臘侯伯の兵を破りて印度河の兩岸を占領し、此の地方に土着したるが、其勢力遠く恒河沿岸の Mathurā に及べり。此の如く、希臘種族は大に勢力を削減せられしが、カーブル方面の希臘侯國は僅に命脈を維持するを得たり。

Sistan 地方に入りし塞種族は强盛なる安息國に接して、次第に其勢力に屈從せしが故に、印度に入るに及んで、尙ほ安息の官名を稱し、西曆第一世紀前半の東洋記事を載せたる Periplus の作者も、亦た塞種其他スキト民族が印度河畔に住することを傳へたり。

然るに、カーブルの希臘侯國は安息國の爲に破られ、國力益々衰へたるが、一方には、既にバクトリヤを領したる吐火羅種族(月氏)は、初め五侯國分立したれども、Kujula Kadphises 興りて之を統一し、强固なる王國となせり。Kujula Kadphises は其の古錢の刻文に於て、自ら K(h)ussano Yavuga と稱す、Kusana は漢史の貴霜、Yavuga はトルコ語 jabgu (君主)と同源語なれば、Kusana Yavuga は貴霜君主の義なり、支那正史に、Kujula Kadphises を丘就却と寫せり。さて、この丘就却は安息に對抗して之を破り、其附庸たるカーブルの希臘侯國を從へて保護

國となし、尋て之を併合して東進の通路を得たれば更に進んで印度河方面の地を領し、カシュミールを占有したるが、西暦四十年八十歳を以て歿す。Wima Kadphises 即ち閻膏珍繼て立ち、深く印度内地に入りて之を征服し、遂に Mathurā に達せり。閻膏珍の位を繼ぐ者を Kaniṣka とし、次を Huviṣka とし、次を Vāsudeva となす、Fleet 博士・Banerji 氏・Lüders 教授の研究によれば、Kaniṣka と Huviṣka との間に Vāsiṣka と名くる王ありといへり、何れにしても、此等諸王の時代、貴霜朝の盛時に當りて、其領土に總督(satrap)を置き、Mathurā, Benares 等の都府に駐在せしめたり。

又た北印度を見るに、イラン系の塞種侵入し來り次に貴霜朝の君王は吐火羅民族を從へて北印度に入れり。從來諸學者は貴霜・吐火羅の人民をトルコ種なりとし、ケネディー氏亦之に從へり。著者は貴霜諸王の名を分解し、Kadphises 即ち Kadphes の kad は Pahlavi 語にて君主・主長の義にして、pises 又は pes は Avesta 語 puesa の轉訛たり、後世イラン種族の人名に Spargapises, Porpes の如きものありて、語尾に pises 或は pes を有せり、pises が aspirate となり、轉化して phises となるの例は、Khṛisanmsya 或は Xapancy の聲音によりて認むることを得、之を要するに、Kadphises の名稱はイラン語にて說明するを得べし。

進んで迦膩色迦王の年代を論ずるに必要なるは、古錢・健陀羅美術・古文書なり。古錢研究にては、正確の年代を定め難きものあり、健陀羅地方にては、迦王の像を發掘し迦王の像を刻せる舍利瓶を發掘したり。Foucher 教授は近頃倫敦大學に講演をなし、迦王を以て健陀羅美術の中葉に出世したる君主となせり、この說は、健陀羅美術がミリンダ王時代に始まれりとするものゝ如く、フ氏の說は迦王の年代を比較的早く定めんとするか。Dahlmann 師は聖トト

マスの傳說を論じ、Gondophernes の治下にありし安息民族が健陀羅美術の保護者なりと認めたるが、ダ氏の說は恰もフ氏の說と同じく、迦王の年代を以て、健陀羅美術期の中葉に置くべき結果を見るべし。次に古文書學上より之を見るに、迦王の Kharosthi 文字は、Taxila, Mathurā 方面にありし塞種總督の文字より後にあり、又其 Brāhmi 文字は西方諸地の總督の文字に類す。

次に貴霜朝諸王の刻文を見るに、年數とも認むべき數字を有するもの少からず、

Kaniṣka 3—11(or 18), Vāsiṣka 24—28,
Huviṣka 33—60, Vāsudeva 74—98

是なり、3は紀元三年、98は紀元九八年なりとすること學者の一致する所なれども、何れの紀元なるかの問題に至りては異說多し。フリート氏は Vikrāma 紀元の年數なりと主張したり、此紀元は本と Mālva 地方に行はれ、次第に諸國に擴がり、Vikrāma 紀元

年數を有する刻文にして、現存せるものゝ中、428の數あるものを以て最古となす。この紀元は紀元前五八年を以て元年とするが故に、この紀元の四二八年は即ち西暦三七二年に當る。若しフリート氏の說を貴霜諸王の刻文年數に應用すれば、Vāsudeva の九八年は西暦四〇年に相當し、殆んど Kadphises と同時となり、之より九十八年前に君たりし迦膩色迦王は貴霜統の支系として、Kadphises の本系に非ざるものと認め、特別の途を通じて印度に入りしものと論定するの必要を生ず、卽ち迦王にして Kadphises 以前の人なりとせば、Kadphises に滅されたるカーブルの希臘侯伯は迦王時代尙ほ獨立の邦國たり、このカーブルを通過せずして中央亞細亞より印度に入るには、カシュミールを通過するの外なし、而してカシュミールの東南北には連山ありて大軍を動すに適せず、迦王が之を通過せりとするは玄奘其他旅行家の見聞實錄に矛盾す。又た Gondophernes の王朝

を滅したるはWima Kadphisesなること明白なれば
フリート博士の説に從ふ時は、Wima Kadphisesの治世二十六年の中に於て、同時にVāsudevaが位にあることゝなり、甚しき矛盾を生ず、フリート博士一派は如何に之を説明せんとするか。之を要するにフリート博士がVikrāma紀元を以て貴霜朝刻文の數字を解釋せんとするは當れりといふべからず。

迦王の年代に關するケネディー氏の説は、(一)印度に於ける希臘語の位置、(二)絹帛貿易史を以て骨子となす。希臘語に關するケ氏の説は、迦王古錢の文字が總て希臘文字なれば、當時の人民は希臘語を領解せしならん。而してEuphrat河以東の地にあつては、希臘語の行はれしこと西暦第一世紀の末葉を限りとし、其以後に及ばざるが故に、第一世紀以後獨り北印度に希臘語の行はれし理由あらず、即ち迦王は西暦第一世紀又は其の以前の人となるといふにあり。

さて、事實を調査するに、迦王の古錢は、表面の刻文にBACIΛEYC BACIΛEωN KANHPKOYとありて、裏面に神像神名を刻す、即ち或はCAΛHNH (Selenes)或はHΛIOC (Helios)、或はHΦAICTOCの如きもの是なり。ケ氏は希臘語が迦王の領内に行はれ、西方諸國との貿易上、仲介語として之を使用し、刻文となしたりといへり。

今迦王古錢にある希臘語の文句は希臘・塞・安息諸國より傳へたる形跡明白なるが、此等諸民族の古錢を比較するに、北印度を領せしEucratidesに以下の希臘種諸王は、多く古錢の刻文にKharoṣṭhi文字を以て印度の土語を使用し、唯だ文句の内容を希臘風ならしめたり。迦王及び其繼承者は希臘文字を專用し、爾餘の文字を全廢す而してKadphisesは二代共にKharoṣṭhi希臘二樣の文字を竝用したり。文字使用の順序としてケ氏の説は、希臘種諸王のKaroṣṭhi文字專用より直に迦王の希臘文字專用に移り、最後

に Kadphises の兩樣竝用となれりとするにあれども著者は之を以て不自然の解釋となし、Kharoṣṭhī 文字專用より一旦兩樣文字竝用に移り、最後に希臘文字專用に達するを以て自然の變遷となし、年代の順序として、希臘種諸王の次に Kadphises 二王、次に迦膩色迦となさんとす。

元來カロシュチー文字は北印度に行はれし文字なり、而して北印度の中心たる健陀羅に首都を置きし迦王が、カロシュチー文字を全廢して希臘文字を專用したる理由如何。バクトリヤ地方に來りしスキト民族が其言語を寫すにバクトリヤの文字を借れり、このバクトリヤには紀元前三三〇年より一六五年まで百六十五年間希臘種の君主ありて、希臘文字行はれしが、固よりカロシュチー文字の流行を見ず。迦王のスキト語を文字に現はしたるはバクトリヤ方面に於てせし影響なりと認むるを得べきか。

迦王古錢の希臘文字には一種固有の變形あり、著者は希臘・塞・安息・貴霜の古錢を比較調査したるに王朝交代の順序はフリート博士の說を否定し Gardner 教授の說を是定するに至れり、思うに、この時代にありては、刻文にある文字の竝用專用又は希臘語の正訛等、一に地方の狀況により、必ずしも一定せずと雖も、迦王と同時代に西方諸國の總督が使用せし希臘文字を見るに、希臘以外の言語を寫すに希臘文字を以てし、又た使用の希臘文字にも訛變あるを見る、之を迦王の古錢に比較すれば、正にスキト語を寫すに希臘文字を以てし、又た希臘文字に一種の訛變あるを知るなり。此點に關する新發見の二說あり、一はフリート博士の發見に係れるhの存在にして、一はスタイン博士の發見に係れるpの聲音なり。フリート博士の說といふは、貴霜朝刻文の Kharaosta 本來 Kharahōstēs とあるべき中央のhを省きしものにして、安息の總督には Kharahosta 或は Nahapāna の如き人名ありて、其古錢には明にhの字

を有せり。而して迦王及び其繼承者の古錢にhを省けりとて、フリート博士は迦王の古錢を以てKharahosta の古錢より古き時代にありとし、即ち迦王の年代を西暦紀元前に置く傍證となせり、何れにしても、hの字の存在は貴霜朝の刻文がイラン系の言語たるを知らしむる材料となる。次に又た貴霜古錢のpは希臘文字のpに類するを以て、Cunningham, Burgess の二氏はrの音を表するものと解釋し、古錢のKANHPKIをKanerkiと讀みたり、然るにスタイン氏は、pはDoria語 San に源を發し、shの音を表すと說き、學者の注意を惹起したり、ス氏の說によれば、KANHPKIはKaneskiと讀むべく、梵語 Kaniska と相近し。之に對して、フリート博士はカロシュチー文字の[illegible]より出でたるに非ずやといへる假定說を提出したり、ス氏の說は甚だ有力なれども、希臘語のpは嘗てshの音を有したることなく又其使用の期限も紀元前第五世以後に及ばざるが故に、ス氏の說も尙ほ研究の餘地あり。

ケチデー氏の第二の問題は絹帛貿易なり、Chavannes教授は後代西突厥と支那本部との間に行はるゝ絹帛貿易は、當時重要なる商業なりと述べ、ダールマン師は聖トーマスの傳記を調査し、支那本部の絹帛が南方及び西方亞細亞に輸入せらるゝ事實を注意したり。ケチデー氏は、紀元前第一世紀の後半に當り、絹帛が重要なる羅馬の輸入品たりしことを認む。Athanâsâstra の所傳によれば、絹帛は紀元前第一世紀後半より以前にありて、既に印度及び安息に輸入せられたりといふ。ケチデー氏は絹帛貿易の通路として、一は直接安息國を通じてシリヤ地方に入り、一はカシュミール・印度スキト領を通じてシリヤ地方に赴けりといへり、ケ氏は陸路貿易のみに注意せりと雖も、實際羅馬の金貨を印度に輸入せしは主として西方諸國よりBroach港を經由して內地に通ぜる海路貿易にして、紀元第一世紀の頃より次第

に隆盛に赴けることPeriplusの所傳によりて推定せらるべしと雖も、絹帛は當時印度支那間に於ける重要なる通商品に非ずして、寧ろ第二第三流の位置を有せること、Periplus（第四九節）に綿花・胡椒・象牙・陶器の列に絹帛を擧げ、別に絹帛を以て重要品となさゞるに由りて推知すべし。故に假にケヂデー氏の希望の如く、絹帛貿易に由りて貴霜諸王の金貨を說明せんとするも、ケ氏所說の如き紀元前第一世紀の結論を生ぜずして、反て紀元後とするを至當となすべき結論を見るに過ぎず。

又た貴霜諸王の中にも、Kujula Kadphisesは銅貨のみを有し。金貨を鑄造せず、Wima Kadphisesに至り、始めて金貨を造り、以てGupta朝の諸王に及べり。若しケ氏の所說の如く、金貨を有する迦王及び其繼承者がKadphises二王の前代にありとする時は、Kujula Kadphisesは代々通用の金貨を廢止して流通を防ぎ、粗野なる銅貨のみを流通せしめたりと認めざるべからず、而して此の如く認定することは、經濟發展の狀況を無視する結果を生じ、殆んど首肯し難きものあり。

ケ氏は進んでAhin Poshに發見せし古錢の說明を行ひたるが、其の說明に就ても多少の異議なき能はず。このアヒンポシュの古錢といふは、一八七九年此地の古塔を發掘して金貨二十個を發見したり、其內容を見るに、Wima Kadphises十個、迦膩色迦六個、Huvişka一個、羅馬帝Domitian一個、同Trajan一個、同Sabina一個なり、このサビナ帝の古錢より推定して、此等古錢の貯藏は西曆一一七年以前にあることを知るべし。今假にHuvişkaの治世年代が紀元七十八年を以て始まるシャカ紀元を以て年數を計るとせば、貯藏年號たる西曆一一七年はHuvişkaの治世中に當れるを以て、Huvişkaの後に出づるVāsudevaの古錢が、此中に加はらざる理由も亦甚だ明なり。之に反して、若しHuvişkaの治世年號が紀元

前五十八年に始まれる Vikrama 紀元なりとする時は、Vāsudeva の古錢が混入せざる理由の説明に窮し且又古錢中の最後の貴霜王（ケ氏は之を Wima Kadphises に擬す）の年代卽ち西暦七十八年以前と古錢貯藏の年代卽ち西暦一一七年との間に約四十年の間隔を生じ、完全なる年代の説明をなさず。

今日まで發見せられし貴霜朝の古錢を見るに、迦王の古錢は Wima Kadphises の古錢と同一器の中に發見せらること甚だ多くして、迦王の古錢と Huviṣka, Vāsudeva, Kujula Kadphises の古錢とを同時に發見せざると少からず。若し、ケ氏の説の如く、貴霜王統の順序として、迦王及び其繼承者の後に Kujula Kadphises 以下を排列するとせば、Kaniṣka と Wima Kadphises の間に多年の間隙を生じ、屢〻同時に發見せらるゝ古錢上の事實に矛盾すべし。貴霜朝殊に迦王の古錢には婆羅門教・佛教・ゾロアスター教の神名と神像を刻し、必らずしも一宗教の神に限らざるを見れば、迦王は普く當時領土及び其の附近に行はるゝ諸宗教の神像を刻せしめ、公平に保護せし形跡を説明するに足れり。

ケ氏は馬鳴が老年に及んで少壯の迦王と相知るに至れりと云へる事實を引用して、迦王の年代を推定する傍證となせり。著者思ふに、馬鳴と迦王と同時代なりとする事實は、迦王の年代を西暦第一世紀又は第二世紀の出世とするに何等の故障を生ぜず。眞諦譯の『世親傳』には、馬鳴の出生を佛滅五百年とす『世親傳』の著者は佛滅を何年に定むるや明ならずと雖も、假に穩健なる紀元前四八〇年頃とすれば佛滅五百年は西暦紀元二十年となる。然るに、一説の如く迦王の即位年代を紀元前五十八年とし、之に共に馬鳴の年代を紀元前五十八年第二世紀後半より第一世紀前半に指定するとせば、『世親傳』の馬鳴年代に矛盾すべし。

ケヂデー氏が迦王の年代を紀元前第一世紀に定め

んとする理由の一として、『雜阿含經』の一節を應用せり。其の說は四方の大國として、北方の耶婆那、南方の塞、西方波羅婆、東方の吐火羅を擧げたり。ケ氏は之れを解釋して、耶婆那（Yavana）はカーブル塞は Indo-scythia、波羅婆（Pahlava）は安息領の Asia, Arachosia 吐火羅は印度なりとせり。この『雜阿含經』の說は、單に傳說を列擧せしに過ぎざること、恰も玄奘の『西域記』原序に贍部洲の四方國を分ち、南に象主の國、西に賓主の國、北に馬主の國、東に人主の國ありとせるが如し、（參照解說西域記二七—二八頁）固より歷史上の論據となすべき精密なる記事にあらず。此の種の傳說は大抵東を支那、南を印度とするを以て通常の所傳とす、『雜阿含經』の斷片的傳說の如きは、殆んど史料として採るに足らず。

ケ氏は西曆紀元前五十八年の印度紀元を以て、迦王結集の年代となせり、フリート博士は刻文に「迦膩色迦大王卽位第九年」とせるものあるを見て、迦王が印度の帝王として認知せられしは、佛典結集によるものなれば、卽位が結集と同年なるかと說けり。ケ氏は迦王が外國人の血統に屬し、正式に印度帝王たるべき形式上の資格を缺くを以て、印度の宗敎たる佛敎の結集を發願外護するに及んで、始めて印度の大帝王として認知せらるゝに至れり。されば迦王は此年を以て正式に卽位大典を擧げ、治世第一年と稱せりといへり。著者の意見にては、若し結集を以て迦王の紀元元年と定めたりとせば、迦王を尊崇せる佛敎家の記錄に之を載すべしと雖も、經論史傳一として之を傳ふるものなきを見れば、ケ氏が結集を以て迦王の元年とすること、殆んど臆想的議論たるに止まり、印度の歷史上の事實として採るに足らざるなり。

之を要するに、ケヲデー氏の迦膩色迦王年代論は著者の意見と一致せざるもの少からざるを以て、主として同意し難き諸點を列擧し、不同意の理由を說

明したり。著者は前陳の如く、發掘資料を待ちて充分の解決をなさんとするものなれども、現在の意見としては古錢の發掘多きを以て、Kadphises の治世長きを知り、其次に出てたる迦王の即位年代を紀元七十八年と認め、別に不合理の點を見ず、又たラプソン教授は貴霜朝末葉の古錢が安息の風あるを指摘し、貴霜朝の終末は Sasanide 朝の初期に連るものなりとせり、されば、シャカ紀元はシャカ種族征服の記念として設けたる貴霜朝の紀元なりと傳ふる Albirūni の說は正に歷史上の事實に符合せり。(完)

(堀　謙　德)